

武 豊

文●鶴木遼 / フォト●小寺幹雄

異次元のミニタレント



「新しい芸術には、その実現に適しく、新しい種類の才能が不可欠である。」

と、ロシア演劇の巨匠スタニスラフスキーが考えたように、才気に溢れた若者のパワーは、ときとして激しく新鮮に炸裂し、時代を変える原動力となる。

地球上の生きとし生けるものの進化さえも絶えずエネルギーを蓄えながら生存の過程を繰り返してきた。

新しい時代を志すニューウェーブは、旧世代との調和的共存よりも、むしろ旧世代の駆逐によって自らのポジションを獲得してきたのである。

「新人類と旧人類」あるいは浅田彰流の「パラノ型とスキゾ型」の二極対立現象が、ここしばらくの時代の推進力であったことは、疑いない事実だろう。

例えば家父長的なバラノ型騎手加賀武見が切り開いた「闘魂」の地平は、恐るべき50歳のスキゾキッズ増沢末夫に、生涯勝利数においていとも軽々と追い抜かれていった。

それは、過去の全てを背負って立つタイプの騎手加賀武見と、身軽に事態の変化をとらえて生きる騎手増沢末夫の闘いだった。

二極対立の現象に眼を奪われていた私たちは、今年、新人騎手武豊の出現によって、改めて衝撃を覚えることになった。

新しい時代の鼓動。
若き第三の才能が、独自の感性によって、着々と出現の準備を整え、いつきにスポット



ライトの渦中に浮上したからである。
新人騎手武豊は、昭和35年に「闘魂」のバラノ型騎手加賀武見が創った新人最多勝利の勲章を、今まで誰もなし得なかった新人騎手の重賞連覇(京都大賞典、京都新聞杯)という付加価値をつけて奪い取った。

一つの競馬史を築いた加賀武見が引退を決意し、彼と同年の衰え知らぬスキゾキッズ増沢末夫が生涯最多勝利数をさらに伸ばそうとするとき、彗星のように出現した武豊は、第三の感性によって騎手としてのポジションを獲得した。

新しい時代への期待によって生まれた武豊は、世紀末に異次元から突如現れた「ミュータント」と言えるかも知れない。

☆ ☆

武豊18歳。ヘタウフの魔術師と呼ばれた関西の雄、武邦彦調教師の三男坊である。京都定で生まれ、まもなく栗東へ移った。最も古い記憶は、三歳の頃の風景だと彼は言う。

「いつも馬が運動していた。」

しかし武豊は、競馬社会の中で純粋培養されて育ったというわけではな。少年野球では内野手として栗東町の大会で優勝したし、サッカーも好きな少年だった。

10歳にもなって乗馬を始めた。ただ乗馬をやってみたくなったからである。馬に乗る快感を覚えたのは、彼の環境からすれば、むしろ遅いくらいだった。

この頃からTVの競馬放送をいつも見るようになった。TVの前に小さな競馬評論家が生まれた。馬に魅かれた少年にとって、全力疾走する馬を騎手が自在に操る競馬は、たまらなく好きなものになっていった。

父の騎乗を巧いとも思いました。でも好きだったのは河内洋さん。下乗りの頃から、幼い僕とよく遊んでくれましたから。

四人兄弟の三番目。兄二人は大学進学への道を選んだが、武豊だけはいつの間にか騎手となることを決意するようになった。が、騎手であった父の道を継ごうとしたわけではない。武豊にとって、自ら騎手となること其自然の流れだった。彼はいつも思うままに自然の流れに従った。現役騎手としての父は、武豊の選択に何も言わなかったという。

思えば、その内的な情熱が外に向かってギラギラしていてもおかしくはないのだが、彼には少しも見受けられない。淡々とした余裕やゆとりが漂ってくる。まるで武豊の周囲を、オーラのように、弾力のある透明な膜が囲っているような気がしてならない。そしてそのしなやかな弾力が、彼のキャパシティを奥深く広げている。



「スクスクと自分の夢を追えました。それを自分でも幸せだと思えます。」

競馬学校へ最後に提出した卒業生アンケートに、自らの目標を、

「たえず研究心を持って、自分の騎乗技術の向上に努め、どんな馬でも全能力を発揮し、人間的にも誰からも信頼されるジョッキーになることです。目標は河内騎手」

と記した武豊。彼の頭脳の明晰さがここにも表れている。武豊の目標は、騎手の必要十分条件を全て満たしていたからである。

今、青春18歳の武豊に様々な質問をした。

「好きな音楽? よくポップスを聞きます。でも「ながら族」で、とりわけ印象的な曲はありません。」

「映画? よく見えます。考えてみると、いつもクールに見えますね。自分を主人公に感情移入して見ることはありません。」

「性格? O型でおっとりしてます。感情の起伏を顔には出しません。四人兄弟の三男坊で、どうしても目立たないポジションですから、まあ抑えよう。って感じ。これが性格でしょう。」

「泣いたことは? 記憶にありません。」

「一番怒ったこと? 怒ったことは、めったにないです。」

「一番うれしかったこと? 騎手試験に合格して、デビューしたことかな。」

「一番悲しかったこと? ……(無言)…。」

「一番悔しかったこと? 毎週ですよ。競馬がありますから。」

「読書? 「優駿」と「競馬四季報」と「競馬ブック」です。資料からレースを再現しながら読みます。深夜でも、次はあの馬に乗るんだと思うと、ハッと起きて目を通します。」

利発な言葉を淡々と語る武豊。彼の若さを



若き日に北海道留萌から放浪の旅に出て、やがて巡り巡って競馬の人となった武田作十郎調教師は言う。

「豊は、利巧な子ですよ。馬に触れる柔らか味があるし、新人とは思えない落ち着きのある競馬をしているしね。」

豊の場合は河内がある。河内の場合は邦ちゃんがいいたから、自ずとそこに流れているものがあるだろうし、それを見習い合ってきたと言えるでしょう。僕は、三人の人間性を育てる配慮をしただけだね。

何故、武田作十郎調教師の元で、武邦彦、河内洋、武豊と、三人の騎手が生まれ得たのだろうか?

「僕は弟子に恵まれました。巡り会えたことに感謝するだけで、後は本人次第なんです。」

やかましいばかりが教育じゃないからね。騎手の条件の一つに、人間的な利巧さがある。それは、教えられて覚えるものではなく、本人が賢く選択するものです。

豊の場合は、両親も立派だったんですよ。よくあそこまで、彼の人間性を育てたと

思えば、その内的な情熱が外に向かってギラギラしていてもおかしくはないのだが、彼には少しも見受けられない。淡々とした余裕やゆとりが漂ってくる。まるで武豊の周囲を、オーラのように、弾力のある透明な膜が囲っているような気がしてならない。そしてそのしなやかな弾力が、彼のキャパシティを奥深く広げている。

思います。
武田作十郎厩舎に脈打つスピリットが、武豊に好影響を与えたことは疑いない。

河内洋は兄弟子として次のように評した。
素直で礼儀正しいね。でも、もつとやんちゃな面を出してもいいかも知れない。
何と言っても一年目なのだから、今年的好調を来年へいかにつなげるかが課題だろう。

今は先行するのが得意だろうが、そればかりでなく自在に騎乗して、先入感を与えないようにすることも必要だろう。

— 弟弟子の突き上げ？ そりゃあ、複雑な心境やね。まだまだ自分も引退するわけにはいかないからねえ。

彼の笑顔の裏側に、これからも互いに騎手として競い合う決意の美しさが見て取れた。

父であり、厩舎の先輩そして騎手の先輩でもある武邦彦調教師は言った。

— 武田厩舎というチームワークのある環境が、まず大きかったと思う。河内洋そして佐藤、牧村助手の存在もね。

— デビュー前には、他の騎手に迷惑をかけずに乗って来て欲しいとだけは思った。

— 今年の豊の成績は、よその調教師に認められて、乗せて貰えることに尽きる。しかし新人で勝ったからと言っても、来年もこの成績であるという保証は何もない。

— 父として？ 豊は、自ら好きな道を選んで進んだんだ。彼が騎手であることは、もう私には関係のないことなんだ。

春、競馬学校の卒業式では、柱の陰からずっと見守るように武豊の騎乗供覧を見ていた武邦彦調教師。しかし今では彼は、子息武豊に対して、プロ対プロとして接するように努めているのだろうか。

客観的な立場から、大阪スポーツの米原記者に武豊評を聞いてみた。

— 競走馬で言えば、まさにサラブレッドやね。育ちがいい。つまり何事においても余裕がある。それに勝負の機微をよく知つとるわ。一度関東に行って、関西とは違ったもつと厳しい競馬を経験してみる

のいいことやろかね。

☆ ☆

人をもスツと彼の世界に誘う引力のような、武豊を軸にして、170cmの長身をさらにしなやかに前傾させた躍動感ある騎乗。物事にこだわることなく淡々として自然に任せ、自らを委ねきることのできる浮遊感覚……。

今年衝撃的に出現した第三の感性と才能は、従来の二元対立の構造を超えて、まるで異次元から現れた「ミュータント」が示すような新しい力を発揮している。



武豊は、真実の芸術を目指した巨匠スタニスラフスキーが記した通りに、「常に自然を眼前におき」、「演技している(騎手という)役柄の皮膚感覚の中に入り込み」、「自分自身のメソッドを創造し」、さらにそれらを自己の中に確立している。

— そんな彼を、父子の絆によって、かつての騎手武邦彦のレプリカと考えるのは、誤りだろう。《ターフの魔術師》と呼ばれた父のイメージを払拭して、武豊は、新しい時代に似合う称号を与えられるべきなのだ。

騎手にとって、競馬は厳しく難しいものである。しかし騎手は、競馬という日常性を離れた言わば虚構の現場で《勝利》することによってしか、自己を確認することも、まして他者に認知されることもない。さしあたり武豊は、いかに恵まれた環境にあるとは言え、眼前のチャンスを《勝利》によって確実に自らのものとし、さらにチャンスを大きくした。それが、新人最多勝記録更新の歴史的快挙へとつながったのである。

— 武豊は、騎乗のとき透明なゴーグルを使わないと言っ。彼はいつも濃い色のゴーグルを使用するのである。

— 僕の顔の表情を、他の騎手にも、ファンにも見られたくはないんです。本当の自分はいい加減な奴だから、騎乗でも、生活でも、本当の自分を見せたくはないんです。

18歳にして、ここまで徹し切る武豊のプロ精神に、率直に敬意を表したい。やはり彼は、異次元から現れた「ミュータント」なのだろう。

— 秋の夕暮れどき、武豊は、さりげなく自己主張した彼の愛車Be-1の前で、遠くを眺めるように言った。

— 騎手は、僕にとって誇り得る職業です!!

- 新人最多勝利
- 新人最多騎乗
- 新人最多賞金
- 新人重賞連覇
- 新人最短クラシック騎乗

— 以上が11月16日現在、武豊が達成した記録である。